

初期意図論争における意図の概念に関する研究

河合大介

本論文は、20 世紀の英米の美学において長く議論されてきた作品解釈と作者の意図との関係に関わる〈意図論争〉における意図の概念を再検討するものである。その際、とりわけ論争の初期における主要な論者たちの意図概念を分析することで、解釈における意図の特権性を相対化し、作者を中心とする解釈モデルを示すことを目的とする。

意図論争で問題となるのは、ある作品の意味について異なる選択肢があるときに、作者の意図が選択の基準となりうるかということである。この論争には2つの極端な立場が設定できる。ひとつは、作者の意図が作品解釈の正しさの基準であるとする〈意図主義〉であり、もう一方は、作者の意図を参照することを禁じる〈反意図主義〉である。しかし、これら極端な立場は明らかに現実的ではないため、現在ではそれらの欠点を補った〈穏健現実意図主義〉と〈仮想意図主義〉を中心に、いくつかのヴァージョンが提出されている。このような細分化・複雑化していく論争の状況に対して、本論文では、論争の出発点に戻って、意図の概念を再検討することで新しい道筋を示すを試みる。

この論争の発端は、W. K. Wimsatt と M. Beardsley（以下、W&B と表記）による論文「意図の誤謬」（1946）である。それは、〈精読〉を作品研究の中心的方法とした〈新批評〉の理論を結晶化したものと評価されている。精読が導入された背景には、それまでの文学研究が、作品を作者についての資料として扱う伝記的研究か、批評家の主観に依存した印象批評が主流であったため、正当な学問としての文学研究の規範が必要だったという背景があった。初期の意図論争は、こういった歴史的背景のもとで理解する必要がある。

第1章では、現在の意図論争において主流となっている穏健現実意図主義と仮想意図主義を比較することで両者の問題点を示す。前者が抱える問題として、現実の意図がそれ自体としては観測できないこと、意図が作者個人に関わる情報のことを指すとしても、それが誤った解釈をもたらす可能性があることを示す。また、解釈によって意図が明らかになるのか、解釈の正しさの基準として意図を参照するのかという循環もある。さらに、意図と結果の因果的關係が偶然である可能性など、他にもいくつかの欠点が指摘できる。他方で、仮想意図主義にも乗り越えるべき障害がある。それは、参照する資料の線引きにおける恣意性であり、また、作者が

実在しない仮想的存在であることによって、作者のミスを許容する余地がなくなることなどであった。これらのことから、現実意図主義も仮想意図主義も、修正と細分化によって問題解決に至る見込みは少ないことがわかる。

第2章では、論争初期の意図概念を検討するために、その前史とも言える新批評について論じる。特に、新批評の主要な論者たちの議論を検討することで、彼らの主張が形式と内容の二元論を乗り越えるものだったことを示す。このことが意味するのは、作品の実現に先立って作者の意図が存在するという考え方が、新批評の枠組みでは不可能だということである。というのも、その場合、作品制作とは、制作に先立って内容が意図として存在し、それを適切な形式において実現することになるが、新批評においては、形式と内容は区別できないからである。また、新批評が言語的慣習以外の背景情報を無視して作品それ自体だけを分析する〈精読〉の手法にこだわったということが誤解であったことも確認する。彼らは作品を歴史研究の材料とすることを批判したが、歴史的知識を参照することは認めていた。そして、当時のそのような理論的方向性は、学問としての文学研究の客観性と自律性を確立するという使命のもとで生み出されたものである。

第3章では、新批評の理論を念頭に置いて、W&Bの反意図主義を検討する。ただし、論文「意図の誤謬」ではなく、その考えが端的に表明されている1943年の事典項目「意図」を対象とする。そこでの彼らの主張は、新批評と同様に、作品自体だけを解釈の対象とすべきだと主張しているのではなく、解釈に役立つような「中間的」証拠もまた、参照可能だと考えているのであり、歴史的情報を排除するような素朴な反意図主義へと彼らの主張を還元することは不適切である。とはいえ、彼らが歴史的情報を考慮するのは、作者の意図を発見するためではない。もしそうであるならば、作品とは別に作者の意図が存在することになり、またしても意図としての内容を形式に当てはめたものが作品であるという、形式と内容の二元論に陥ってしまう。彼らが意図という概念の使用自体を不適当なものとしなしているのはそのためである。

第4章では、初期の意図主義の代表者とされるHirschの主著『解釈の妥当性』（1967）について論じる。Hirschは批評と解釈を区別し、前者を評価に、後者を意味に割り当て、後者を学問的課題とする。彼は、解釈において作者が重要な役割を持つことを強調する。それは、テキストが持ちうる複数の意味から選択する基準は読者ごとに異なるが、学問として唯一説得力を持ちうるのは、作者を基準とすることだと主張する。注意すべきは、Hirschは、意図という言葉に特別な意味を与えておらず、ときに作者、あるいは作者の意志とも表現していることである。Hirschのこういった傾向は、彼が作者の意図を特別視しておらず、むしろ作者を重視していることを示唆している。実際、彼が解釈やテキストの意味を説明する際に援用する、タイプや内在的ジャンル、クラス、確率といった概念は、作者の無意識の意味、意味の曖昧さ、意味の共有可能性を含んでおり、そのことは、作者の意図を解釈と照合すべき明確かつ一義的な意味とすることは矛盾する。Hirschが記述する解釈のプロセスは、あらゆる証拠を用いながら、意味を確定するのに適した証拠を絞り込んでいくものである。そこでは、正当性を根拠付ける証拠の数や種類が前もって決まっているわけではなく、様々な証拠を相互に照らし合わせて、それぞれの証拠の正当性がその都度検証されるものと考えられている。Hirschが作者の重要性を強調するのは、作者が意味しうる意味へと可能性を限定していくことで、解釈の

幅を狭めていき、より妥当な解釈に接近するためである。Hirsch 自身は「意図」という用語を疑問視することなく使用しているが、彼の主張をより正確に表すならば、むしろ作者の概念に重心が置かれていると言えるだろう。

これらの議論を経て、本論文は次のような結論に達する。作品解釈において、私秘的な意図概念にかえて、公共的存在である歴史的な作者を解釈の基点に据えることで、学問的コンセンサスの可能性が確保される。そして、意図を他の関連する証拠と同じ地平におくことで、相互にその信頼性を検証していくような解釈のモデルを提案する。この検証プロセスの具体的な内実についてはさらなる研究が求められるが、このモデルは作品解釈のための理論的基盤となるだろう。

付記

本稿は、成城大学大学院にて、の要旨である2024年9月に受理された博士号学位論文「初期意図論争における意図の概念に関する研究」の要旨である。